

2025年10月4日(土)、大谷中学・高等学校の創立150周年記念式典が国立京都国際会館イベントホールにて開催されました。来賓、生徒・教職員合わせて2,400名が集い、創立150周年という大きな節目を祝いました。

大谷の原点と、受け継がれる志。



小雨の降るなか、次第に賑やかになる会場

2025年10月4日(土)、大谷中学・高等学校の創立150周年記念式典が国立京都国際会館イベントホールにて開催されました。150周年のテーマは「樹心 一問い、気づく。問い、築く。一」。

生徒や教職員から寄せられた声をもとに、「立脚地に気づき、共に未来を築く」という思いを込めて定められた言葉です。

当日は生徒、教職員、来賓を合わせて2,400名が集い、創立以来150年の歴史を重ねた大谷が次の時代へどのように歩みを進めていくのか、その答えを探す一日となりました。



本校の原点とも言える「京都府下小教校」が東本願寺によって下京区に開かれたのは1875年。

1888年には「京都府尋常中学校」を併設し、初代校長に思想家・教育家として知られる清沢満之（きよざわまんし）先生を迎えました。親鸞聖人の主著「教行信証」より選びとられた「樹心」という建学の精神は、時代を越えて今も継承されています。

生徒、教職員の手でつくる式典。

150周年という大きな節目を迎えるにあたり、教員や生徒会を中心に長い時間をかけて進められてきた式典の準備。当日の朝、地下鉄の改札から会場までの通路には生徒会のメンバーが立ち、明るい笑顔とともに参加者を出迎えました。

会場の席案内やアナウンスも生徒たちの手で行われ、列席者が次々と集まるなか、開式前から会場には期待と喜びに満ちた空気が漂っていました。



フォトブースで記念撮影を楽しむ生徒たち

いよいよ始まった、第一部「生徒の集い」。司会による開式宣言のあと、中学生代表と高校生代表が挨拶を行い、150年の歴史の重みと未来への思いを語りました。



「自分自身を問い、その中で気づいたことを友達と共有することが新しい自分を築いていくことにつながると感じています。歴史を受け継ぐ私たちが、大谷生であることに誇りを持ち、次の時代へバトンを渡していけるよう日々を歩んでいきたいです。」(中学生代表)



「150周年という節目の年に、在校生として立ち会えたことを誇りに思うと同時に、私たちも次の歴史を作る責任を感じています。その責任を果たすためにも、『生かされて生きている』という事実感謝しながら、仲間が困っている時には迷わず手を差し伸べ、誰もが安心して過ごせる、明るく活気ある学校をみんなと一緒に築いていきたいです。」(高校生代表)

卒業生の活躍とあたたかいメッセージ



学校の成り立ちと150年の歩みを振り返る映像に続き、会場のスクリーンにはさまざまな分野、場所で活躍する卒業生からお祝いのメッセージVTRが映し出されました。



ビデオレター映像に合わせて演奏してくださった卒業生の井上暖之さん

場内に流れる音楽を演奏していたのは、卒業生であり、現在は大阪音楽大学に在籍するエレクトーン奏者の井上暖之さん。

テレビ番組出演などでも注目を集める井上さんが、美しい演奏とともに後輩たちへエールを贈りました。



「今回BGMを制作するにあたり、さまざまな卒業生の方々のメッセージを拝見し、改めて150年という大谷の歴史の中に通ずる“芯”に気づくことができました。高校時代、個性的な仲間に出会い、勉強に費やした時間は今でもとても有意義だったと感じています。皆さんのこれからの学校生活が、より充実して楽しいものになることを願っています。」(井上暖之さん)

続いて登壇した卒業生は、奈良市にあるよもぎ餅が名物のお店「中谷堂」の代表取締役・中谷充男さん。

「この大きな節目の年に関われたこと、ありがたい気持ちでいっぱいです。」と語り、生まれ育った奈良で受け継がれてきた餅つき文化についても紹介しました。



150周年のお祝いに餅つきを披露した「中谷堂」のみなさん（中央が中谷充男さん）

テンポの速さで知られる中谷堂の餅つきは、熱いうちにしっかりつくことによって、滑らかで美味しいお餅ができるのだといいます。そしていよいよ、目の前で始まる高速餅つき。

中谷さんが迫力満点に杵を振るたび、会場からは手拍子と歓声が沸き起こります。



見事な高速餅つき。その迫力とスピードに会場は大盛り上がり



150周年を記念し、140回まで中谷さんが餅をつくと、残りの10回は乾校長が担うことに。



「141!」「142!」と生徒たちの掛け声に合わせて杵が力強く振り下ろされ、大きな拍手と笑顔に包まれながら“150周年の餅”が完成しました。

150年の重みと感謝のことば。



第一部が幕を閉じ、続いて始まった第二部「記念式典」。

「黙想」の声に合わせてオルガンの柔らかな音色が響き渡ります。合掌のあと、三帰依を斉唱。その荘厳な響きがホールに広がり、場内はより一層厳かな空気に包まれました。

第二部の司会を務めたのは、大谷高校の卒業生であり、現在は静岡第一テレビでアナウンサーとして活躍する佐藤優里さん。さわやかな声が会場を包み、第二部の式典の幕が開きます。



卒業生の佐藤優里さん

最初に登壇した真宗大谷学園の木越渉理事長は、親鸞聖人の言葉を引用して「清沢満之先生が伝えようとした思いを受け止め、今をどう生きるのか——その姿勢そのものが先人たちの願いに応えていくことになる」と語り、150年の歴史の重みを胸に、これからも力強く歩む決意を新たにしました。



学校法人真宗大谷学園 木越渉理事長

続いて、真宗大谷派東本願寺門首の大谷暢裕氏が登壇。

「相互に敬愛せよ」という言葉を紹介しながら、「それによって豊かな人間関係がひらかれていきます。これまでの大谷を知る中で、これからの大谷に何を願うのか。」と生徒たちに問いかけます。そして、「あなたはあなたの ままでいい。周りの人と比べる必要なんてありません。」と、一人ひとりの存在を肯定するように、あたたかい言葉を贈りました。



真真宗大谷派 東本願寺 第26代門首 大谷暢裕氏

続いて挨拶を行ったのは、保護者会会長であり自身も大谷の卒業生である富田智樹さん。

「本校の卒業生として皆さんの少し先を歩む私は、“樹心”という言葉から時に問われ、時に促され、歩まされていることを感じます。この言葉は、皆さんが今後の人生でさまざまな岐路に立った時、きっと足元を照らし出してくれるはずです。」と語り、自身の経験を交えた言葉に生徒たちも静かに耳を傾けました。



保護者会会長 富田智樹氏

挨拶の締めくくりは、乾文雄校長。壇上に立った校長はまず、「人間関係の基本はコールアンドレスポンスです。こんにちは！」と大きな声で目の前の生徒たちに呼びかけます。会場からも「こんにちは！」と返事が届き、会場の空気がふっとやわらぎました。



いつものように生徒と挨拶を交わす乾校長

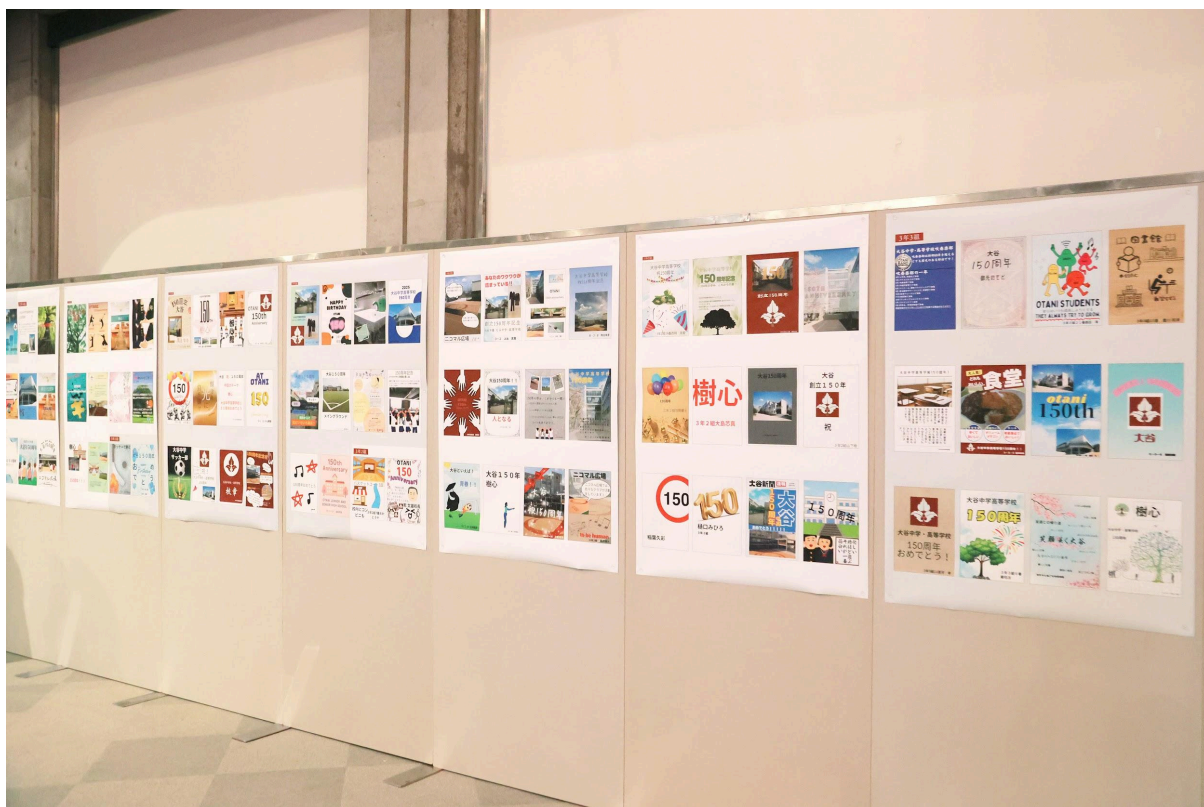
校長はその光景に笑顔を見せながら、次のように話し始めます。

「仏教に根ざした人間教育が150年間絶えることなく受け継がれ、大谷という学び舎がいま存続しているという事実は、まさに奇跡に近いものがあります。先人のご苦勞に頭の下がる思いです。」



そして、未来へ向けてこう締めくくりました。「今日は次の150年に向けた新たな一歩を踏み出す日でもあります。その責務を感じながら、親鸞聖人ならびに初代校長・清沢満之先生が本校に願われた“樹心”の教育を再確認し、皆さんと共に学び続けていきたいと思います。」

生徒の感性が光る150周年企画



会場に飾られていた色とりどりのポスター。これは150周年記念式典の企画の一つとして開催された「中学ポスターコンテスト」の作品で、中学生が“大谷の魅力”をテーマに描いたもの。

式典では、個性あふれる応募作品の中からファイナリストに選ばれた10作品が紹介され、優秀賞、最優秀賞の表彰式が行われました。

入賞した10作品は、11月17日から11月23日に京阪東福寺駅およびJR京都駅構内に期間限定で展示され、個性あふれるポスターが、いつもの通学路に彩りを添えます。



ポスターコンテスト優秀賞・最優秀の生徒には、乾校長から表彰状が授与された

続いて発表されたのは、有志の生徒たちが150周年を祝う気持ちを込めて動画を制作した「動画コンテスト 大谷応援団」の入賞作品。

選ばれた入賞作品5本が会場スクリーンで上映されました。

優秀賞に選ばれたのは、高校3年生(C-1)がクラス全員で制作した作品。乾校長からトロフィーを受け取ると、クラス代表は「高校生最後の思い出にこのような賞をいただき、クラス一同、心からうれしく思います。ありがとうございます！」と喜びを伝えました。



喜びを語るクラス代表

続いて、最優秀賞の発表の前に「特別賞」が発表されました。

乾校長は自身が選んだという特別賞について、「私はこの動画を5回見て、5回目でやっと意味がわかりました。10代前半の子がバレーボールに開いた穴に名前をつけて楽しんでいる—その発想に惚れてしまいました。」と選考理由を語りました。



思いがけない“特別賞”の受賞を喜ぶ生徒

最優秀賞に輝いたのは高校2年生3名による共同作品。「青春の5年間を大谷で過ごしたこともあり、学校に対して何かできることはないかという思いでこの動画を作りました。」と制作への思いを語りました。乾校長が「本当に伝えたいことを全部入れてくれていた。」と賛辞を贈ったとおり、大谷の歴史や魅力を30秒の中に凝縮した彼らの作品は、会場でもひととき大きな反響がありました。

優秀賞を受賞した本作品は、11月17日から11月23日の期間限定で、JR京都駅構内のデジタルサイネージに放映されます。

創立150年という節目を、生徒たちの創造力と感性で彩ったこのコンテスト。改めて受賞者全員が舞台上に並ぶと、会場からは惜しみない拍手が送られました。



みんなで考える「樹心」



続く企画は、「樹心を解き明かせ！」。

150周年のテーマ「樹心」への理解を深めるための 特別映像が、スクリーンで上映されます。そのVTRの中で、大谷の生徒から手紙をもらい、樹心の意味を解き明かす手伝いに学校を訪れたのは、お笑い芸人のみやぞんさん。個性豊かな大谷の生徒たちと交流しながら、教職員や生徒たちに「樹心とは何か？」を問いかけていきます。

(樹心とは...)「木(樹)のように長い年月をかけて育っていく思い」「それがないと自分の 人生を楽しめないもの」などさまざまな意見が生徒から集まるなか、卒業生から寄せられたメッセージにも、その答えのヒントが散りばめられていました。

「自分自身を見つめ直すこと。その時間こそが“樹心”という行動そのもの」(井上暖之さん)

「樹心とは、堂々としていられる安心の源」(中谷堂・中谷充男さん)



VTRの中でも奮闘した高校生と中学生の四人と、VTR収録だけでなく、式典当日にも駆けつけてくれたみやぞんさん（右）



さまざまな声を受けて、最終的に生徒たちが導き出した答えとは——「木のように根をはって、経験を経て、心の中で成長すること」。

そして、一日を通して大谷の生徒や教職員と会話をしたみやぞんさんが出した答えは、

「正解を自分で決める心のこと。考えろ！そして、感じろ！」。



果たして、乾校長の答えとは？ VTRの上映後、その答え合わせがステージ上で行われます。

映像に出演した生徒たち、乾校長、そして特別ゲストのみやぞんさんが登壇し、「樹心とは何か」を語り合うトークセッションがスタート。さらにこの日は、もう一組のサプライズゲストが招かれていました。

佐藤アナウンサーの呼びかけで現れたのは、大谷高校の卒業生であるロッチの中岡創一さんと、相方のコカドケンタロウさん。思いがけないゲストの登場に、生徒たちからは大きな歓声が上がります。



左から、乾校長、みやぞんさん、ロッチのお二人（コカドケンタロウさん、中岡創一さん）



10年前の140周年記念式典にもゲスト出演したロッチのお二人。当時、生徒として式典に参加していたという佐藤アナウンサーは、こうして舞台で再会できたことへの感慨を語りました。

中岡さんが高校時代の“あまり大きな声では話せない”思い出を披露すると、会場は大盛り上がり。一方、大谷の卒業生ではないコカドさんも「樹心」という言葉を自分なりに解釈し、乾校長から「素晴らしい答えです」とお墨付きをもらう場面もありました。



コカドさんのミシンの動画もチェックしているという乾校長



問いを持ち続けることで、大事なものに会う。



ゲストを交えてトークが繰り広げられるなか、乾校長は最後にこう語りはじめました。

「常々思っているのは、答えよりも問いを持つことが大事だということ。今の時代は、いかに答えを手に入れるかばかりに躍起になっています。問いを持ち続けるのはしんどいけれど、そこで大事なものに会えるんです。」

そして、乾校長自身が考える“樹心”の意味を改めて生徒たちへ伝えました。

「樹心の“樹”は木ではなく、動詞なんです。世界記録樹立の“樹”のように、“心を樹(た)てる”ということ。でも、ただ立っているだけでは何かにぶつかった時に倒れてしまうかもしれない。だからこそ、みんなの言うように大地に根を張って、揺さぶられようが、しんどかろうが、立ち続けられるように。その“樹”なんです。」

広い世界で生きていけば、時に人を傷つけてしまうこともあるでしょう。ふさぎ込み、どうしようもないところまで落ち込むこともある。それでも『自分であるということを喜んで生きていく』、その願いこそが“樹心”なのかなと私は思います。」(乾校長)



その言葉を聞いたみやぞんさんは、「“樹”が木じゃないことにびっくりしました。生きるという壮大な話になってびっくりしたけれど、腑に落ちました」と語り、「自分の感性を信じて前に進むことが最高の樹心。その人が考えて出した答えこそ、その人にとっての樹心だと思います」と、優しく力強いメッセージを生徒たちへ贈りました。



「後輩なら俺のことを知っているはず！」と、ロッチTシャツをかけてクイズを出す中岡さん

第二部のクライマックスは、ロッチのお二人によるスペシャルステージ。

クイズコーナーでは生徒たちと交流し、終始会場を盛り上げてくれた中岡さんとコカドさん。最後にとっておきのコントも披露してくれました。今日一番とも言える大きな拍手と笑顔のなか、二人は舞台を後にしました。



次の150年へ向けた、新たな一歩



副校長 北畑賢一郎先生

閉式の辞では、北畑賢一郎副校長が式典を無事に終えることができた感謝を述べるとともに、自身もその意味を問い直したという150周年のテーマ“樹心”について語りました。

「たどり着いた答えは、人のためにできることを精一杯やり遂げるということです。私たち 一人一人は、それほど大きな力がないかもしれませんが、大谷に集う生徒、保護者の皆様、教職員がそれぞれの立場でできることを精一杯やり遂げることで、良き伝統を引き継ぎ、さらに発展していきたいと思っております。」(北畑副校長)

閉式の辞のあと、会場に集った生徒、教職員、来賓、卒業生、保護者が一体となり、校歌を斉唱。その声がホールに響き渡り、150年を祝福するように余韻を残します。



式典終了後には、中学・高校の生徒会メンバー総勢70名が舞台に上がり、記念撮影。

無事に式典を終えた喜びと、互いを労う言葉が交わされるなか、笑顔と感謝に満ちた一日が幕を閉じました。



150年という長い年月の中で、大谷中学・高等学校は数え切れない生徒を送り出し、数多くの出会いと学びを育んできました。その間に芽吹いた“樹心”は、一人ひとりの中に息づき、これからも成長し続け、自身を支える指針となるはず。

150年の節目の式典は、その心を次の世代へと受け継ぎながら、未来へ向かって新たな一歩を踏み出す大切な一日となったに違いありません。

Interview & Text: Asako Saimura

Photo: Michiko Wakabayashi / Naoko Azuma